

Dark Tourism 試論

「負の遺産は観光資源になり得るか？」

親 泊 素 子*

キーワード：ダークツーリズム、負の遺産、世界遺産、足尾銅山鉱毒事件

はじめに

数年前に江戸川大学のサテライトセンター講義の一環で足尾銅山に見学にてかけた。現地でガイドさんが、現在この足尾銅山を世界遺産にするための運動を展開しているとの説明を受けたので、『日本の公害の原点』ともいわれるこの地域を世界遺産に申請するというのもありうる話だとその時には認識をした。しかし、後日いろいろ調べているうちにこの世界遺産申請の理由に、「日本の公害の原点」という「負の遺産」が入っていないことがわかった。

たしかに負の遺産を観光資源とする観光は『ダークツーリズム』と呼ばれ、暗いイメージが付きまとうのであるが、だからといって、このダークツーリズムが観光客を呼び込めないというわけでもない。日本において知られている負の世界遺産に広島原爆ドームがある。これは悲惨な戦争を二度と繰り返さないようにするための、平和の願いを込めて指定された遺産である。同じように足尾銅山鉱毒事件も我々にこのような公害事件を二度とおこしてはならないという教訓を示し、かつ道徳的価値の高い観光資源を有している。しかし、足尾の人々がなぜにこの地域を「負の遺産」として取り上げることをためらったのであろうか？ ま

た、通常のツーリズムがレジャー、レクリエーションといった気持ちをプラスにもたらす存在であるのに対して、ダークツーリズムというのは、「悲しみのツーリズム」とも呼ばれ、マイナスの気持ちに陥りがちな暗いイメージのツーリズムであるが、なぜにこういったツーリズムは存在するのだろうか？ 本研究では、足尾の人々が、世界遺産の指定運動に「負の遺産」としての登録をためらった理由を探ると同時に、今一度、ダークツーリズムの観光資源としての価値について整理を試みた。

I. 観光の種類

観光にはいろいろなタイプがあり、最近のツーリズム研究もいままでの団体観光のようなマストツーリズムから環境配慮型のサステナブルツーリズム、もしくは今までにないタイプのニーチェツーリズム（隙間観光）といわれるものまで、多様なツーリズムについての研究が盛んになってきている。また、農業観光をグリーンツーリズムと称したり、海や湖などの水に関するツーリズムをブルーツーリズムと称したり、ツーリズムを色で表現するカラーツーリズムと称するツーリズムもでてきている。グリーンやブルーの他に、中国の聖域を旅するレッドツーリズム、菜の花畑の一面の黄色をイメージしたイエローツーリズム、北海道の雪のイメージのホワイトツーリズムなどが聞こえてくるが、その他にブラックツーリズムならぬダー

2011年11月29日受付

* 江戸川大学 ライフデザイン学科教授 環境政治学

クツーリズムのジャンルも最近の注目を浴びている。グリーンツーリズムは農業体験を基調としたアグリツーリズムであり、ブルーツーリズムはマリントーリズムやアクアツーリズムという別名があるように、ダークツーリズムは grief tourism (悲しみのツーリズム), poverty tourism (貧困のツーリズム) といったまさに字の通りの暗いイメージのツーリズムの総称といってよい。

II. ダークツーリズムの種類について

一般にダークツーリズムの定義は、「死、悲劇、災害等まつわる観光」と定義されており、昔から行われていた。例えば、ローマ時代のコロシウムでの剣士の闘い、中世における処刑見物、英国ビクトリア時代の死体公示所見学、マダムタッソーの恐怖の館等が挙げられる。19世紀の中ごろには、トーマス・クックがイギリス人の観光客をアメリカの南北戦争の跡地に連れて行く旅を企画した。また、ブースティンによると、英国の最初のダークツーリズムのツアーは1838年に列車で二人の殺人者の絞首刑を見に行った旅行とされている。このように、昔から死や悲劇というものは人々の好奇心を引き付けてきた⁽¹⁾。

また、最も悲惨な例としてあげられるのが600万人もの人々が殺されたと言われているナチの強制収容所や、1970年代のカンボジアの大量虐殺で2万人近い人々が殺された場所等がある。また、アムステルダムのアネ・フランク博物館や1980年にジョン・レノンが撃たれて殺されたことを記念してつくられたセントラルパークのストロベリーフィールドメモリアル等もダークサイトとしてあげられる。その他、1997年にパラッツィに追いかけて、交通事故でダイアナ妃がなくなったパリのトンネルや、9.11テロによる世界貿易センタービル跡のグラウンドゼロなどもダークツーリズムの対象地と言える。日本の場合には原爆が投下された広島、長崎や、沖縄の南部戦跡やひめゆりの塔等がダークツーリズムサイトとしてあげられる。また、今年の3月に起こった東日本大震災の被災地もこのようなポテンシャル

を持った場所といえよう。

リチャード・シャープレー (Richard Sharpley) (2009) は旅行者のダークツーリズムへの興味の深さとそれを提供する度合いについて4つに分類している⁽²⁾。

1. Pale tourism (ペールツーリズム)

さほど、死についても興味があるわけではないが、偶然訪れた場所がそのような所だった。

2. Grey tourism demand (グレーツーリズムの需要)

死について多少の興味を持っており、無意識に訪れた場所がダークツーリズムの場所だった。

3. Grey tourism supply (グレーツーリズムの供給)

死にまつわる場所であるが、死自体がメインの観光資源ではない。

4. Black tourism (ブラックツーリズム)

死に関心のある観光客にそのような体験をさせることにより訪れる観光客を満足させる。

また、ストーン (P. Stone) (2006) はダークツーリズムの供給の仕方によってダークツーリズムの度合いを以下の図のように分類している⁽³⁾。

ダークツーリズムはさらに次のような細かい呼び名も使われている⁽⁴⁾。

- Holocaust tourism ホロコースト
- Battlefield tourism 戦跡
- Cemetery tourism 墓地
- Slavery-heritage tourism 奴隷貿易港など
- Prison tourism 監獄, 流刑地
- Disaster tourism 津波, ニューオーリンズのカトリナ・ハリケーン, 雲仙普賢岳の噴火, 神戸, 宮城, 新潟の地震, 東日本大震災等
- Poverty tourism 貧困のツーリズム, フィリピンのスモーカーマウンテン, 孤児院等
- Suicide tourism 二つのパターンがある

① 自殺できる名所に行く＝富士山のふもと
の樹海

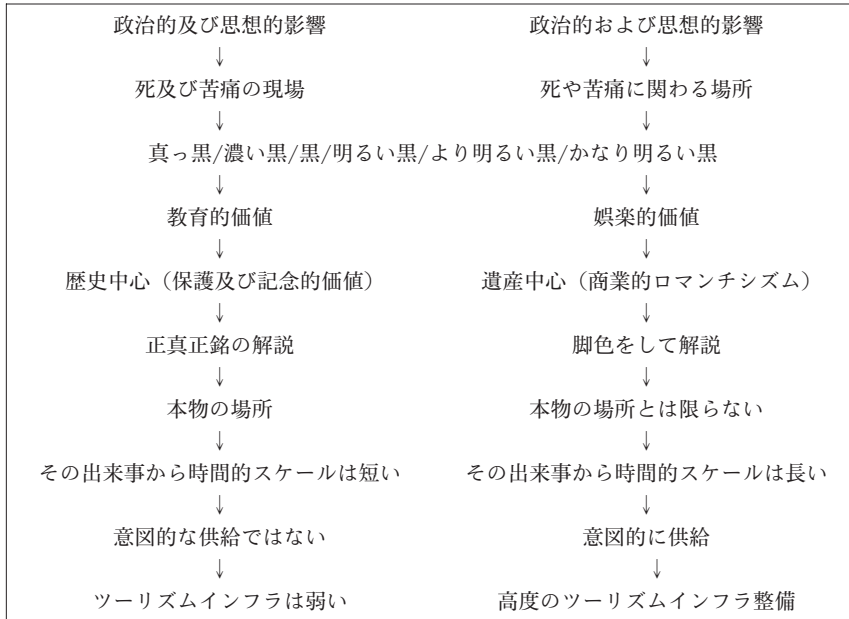


図 ダークツーリズムのスペクトラム

(出典：Philip R. Stone The Darker Side of Travel, 2009, p. 21)

- ② 合法的に安楽死が認められる国に旅して、そこで死ぬ。ヨーロッパ等では、ベルギー、オランダ、スイスなどでは安楽死が合法的に認められている。

・Doomsday tourism 足尾銅山等

Doomsday という意味は「最後の審判の日」とか、「世界の終わりの日」とか訳されるが、要はもうすぐなくなってしまう観光地を訪ねる。例えば、地球温暖化で、北極の氷が溶けてしまうということで、北極を旅したり、ベニスの町が水に沈んでしまうということでベニスに行くとかいうような旅をさす。しかし、そのようにして観光客が訪れれば、それなりに観光公害が起り、これらの地域がなくなるという危機は高まる。しかし、こういった旅行者は概して利己的な人が多く、自分たちの見たいという満足のほうが環境倫理感より上回るケースが多い。いずれにしても、こういった負の遺産と言われる場所を訪ねることの意義は、これが訪れた人にポジティブな経験となることかどうかということである。この事件が起こった事実を正しく理解し、この歴史や自分のまわりの環境についてより理解を深められるかどうかという



写真1 支笏洞爺国立公園内の有珠山噴火跡

点にダークツーリズムの存在価値はある。

III. 世界遺産における負の遺産について

世界遺産には、数多くの遺跡や景観、及び自然が登録されているが、この遺産の中に「負の遺産」といわれるものがある。1972年の第17回ユネスコ総会で採択された「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」（世界遺産条約）で定義されている世界遺産とは「人類が共有すべき普遍

的な価値をもつもの」とされ、その分類として自然遺産、文化遺産、複合遺産がある。2011年の第35回世界遺産委員会終了時点における世界遺産の件数は、文化遺産が725件、自然遺産183件、複合遺産が28件ある。しかし、平和の希求や人種差別の撤廃などを訴えていく上でも重要な物件も世界遺産に指定されており、これらは別名「負の世界遺産」と呼ばれているが、負の遺産についての正式定義はない。負の世界遺産の例として以下のような場所があげられる⁽⁵⁾。

1. グレ島（セネガル）1978年文化遺産(vi)。奴隷貿易の拠点だった島。数百万人の黒人が北中南米に送られたという。
2. アウシュビッツ=ビルケナウ（ポーランド）1979年文化遺産(vi)。ナチスの強制収容所で最大規模のもの。百万人以上が殺害されたという説もある。
3. ヴォルタ州グレーター・アクラ州の城塞群（ガーナ）1979年文化遺産(vi)。奴隷貿易の拠点として設置された要塞群。
4. キルワ・キシワニとソング・ムナラの遺跡群（タンザニア）1981年文化遺産(iii)。東アフリカ沖に浮かぶ島で、奴隷貿易の拠点となった。
5. カルタヘナの港、要塞群と建造物群（コロンビア）1984年文化遺産(iv), (vi)。南米北部の奴隷貿易の中心地となった。
6. トリニダード（キューバ）1988年、文化遺産(iv), (v)。ロス・インヘニオス溪谷とともに登録。カリブ海におけるサトウキビプランテーションと奴隷貿易の拠点。
7. 広島原爆ドーム（日本）1996年文化遺産(vi)。核兵器の悲惨さを伝える建物。広島原爆でかろうじて残った。
8. ロベン島（南アフリカ共和国）1999年文化遺産(iii), (vi)。人種隔離政策に反対された人たちが収容された。マンデラ大統領が幽閉された島。
9. ザンジバル島のストーン・タウン（タンザニア）2000年文化遺産(ii), (iii), (vi)。奴隷、

象牙、金等の輸出、東西交易の中継地として栄えたが、ヨーロッパとアラブの双方の文化の影響を受けている。

10. バーミヤン渓谷の文化的景観と古代遺跡群（アフガニスタン）2003年文化遺産(i), (ii), (iii), (iv), (v)。タリバン政権によって破壊された仏像で有名な遺跡群。
11. クンタ・キンテ島と関連遺跡群（ガンビア）2003年文化遺産(iii), (iv)。西アフリカにおける奴隷貿易の中心地。登録当初は「ジェームズ島と関連遺跡群」だったが、2011年に名称変更された。
12. 海商都市リヴァプール（イギリス）2004年文化遺産(ii), (iii), (iv)。奴隷貿易で急速に発展した都市。
13. モスタル旧市街の古い橋の地区（ボスニア・ヘルツェゴビナ）2005年文化遺産(vi)。ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争の間、この古い橋（スタリ・モスト）が破壊され、後にユネスコの支援で再建された。
14. ビキニ環礁の核実験場跡（マーシャル諸島共和国）2010年文化遺産(iv), (vi)。アメリカ合衆国が太平洋核実験場として67回もの核実験を行った。

IV. 足尾の世界遺産にむけての運動

一方、日本には現在、世界遺産に指定されている場所は文化遺産が12件、自然遺産が4件あるが、そのうち東北地方の平泉、中尊寺地方、および小笠原は今年の6月に指定されたばかりの新しい世界遺産である。また2007年に指定された石見銀山は産業遺産として注目され、それを機に国内の鉱山跡地を世界遺産にしようとする機運が高まり、各地の鉱山で世界遺産の指定運動が展開されるようになった。佐渡の金山、銀山も2010年11月に世界遺産の暫定リスト入りを果たし、足尾銅山も熱心に世界遺産の指定運動を展開するようになったのである。しかし、その申請書の内容は日本の公害の原点としての足尾銅山鉍毒事件を負の遺産として申請するものではなく、日本にい

表 日本の世界遺産リスト及び暫定リスト

文化遺産	自然遺産	暫定リスト
1993. 12 法隆寺地域の仏教建造物	1993. 12 屋久島	1992. 10 武家の古都・鎌倉
1993. 12 姫路城	1993. 12 白神山地	1992. 10 彦根城
1994. 12 古都京都の文化財	2005. 7 知床	2007. 01 富岡製糸場と絹産業遺産群
1995. 12 白川郷・五箇山の合掌造り集落	2011. 6 小笠原諸島	2007. 01 長崎に教会群とキリスト教関連遺産
1996. 12 原爆ドーム		2007. 01 飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群
1996. 12 厳島神社		2007. 01 富士山
1998. 12 古都奈良の文化財		2007. 09 国立西洋美術館本館
1999. 12 日光の社寺		2009. 01 北海道・北東北を中心とした縄文遺産群
2000. 12 琉球王国のグスク及び関連遺産群		2009. 01 九州・山口の近代化産業遺産群
2004. 07 紀伊山地の霊場と参詣通		2010. 11 宗像・沖ノ島と関連遺産群
2007. 06 石見銀山遺跡とその文化的景観		2010. 11 金を中心とする佐渡鉱山の遺産群
2011. 06 平泉—仏国土（浄土）を表す建築・及び考古学的遺跡群		自然遺産、複合遺産の暫定リストはなし

ち早く導入した産業技術を申請内容とするものであった⁽⁶⁾。

足尾の世界遺産認定に向けての運動の歴史は以下のとおりである⁽⁷⁾。

- 1994年 「エコミュージアムあしおの創造」（足尾地域開発基本構想策定）
- 2002年 NPO 法人足尾に緑を育てる会設立
- 2003年 産業遺産を活用した観光振興方策策定調査（足尾町周辺）報告書
国土交通省関東運輸局
- 2005年 旧足尾町として足尾銅山の産業遺産の保存・活用を図り世界遺産登録を目指すことが決まり、宇都宮大学と旧足尾町との共同研究事業として足尾銅山の産業遺産の現状調査を開始し、10月には旧足尾町などが主催し世界遺産登録シンポジウムを開催した。
- 2006年10月 足尾銅山の世界遺産登録を推進する会が市民団体として設立された。
- 2007年9月 日光市と栃木県が共同で「足尾銅山」近代化産業化と公害対策の起点をテーマに文化庁へ世界遺産暫定一覧表

追加記載提案書を提出。11月には経済産業省が近代化産業遺産に足尾銅山を認定した。

それでは、なぜ、公害という日本でも多くの影響を与えた事件を負の遺産として申請しなかったのだろうか？ その前に、足尾銅山鉱毒事件とはなにかについてまとめてみる。

V. 足尾銅山鉱毒事件とは

足尾銅山は栃木県西部の渡良瀬川の上流部に位置する日光市足尾町にあり、1610年備前国の農民だった治部と内臓が黒岩山（後の備前楯山）の銅を発見したといわれている。1648年（慶安元年）には徳川幕府の御用銅山となった。産出された銅は江戸城、芝の増上寺、日光東照宮などの銅瓦に用いられ、長崎から海外にも輸出された。一時は1,500トンもの生産量を記録した時期もあったが、江戸時代末期には廃山同様の状態になった⁽⁸⁾。

しかし1877年（明治10年）に古河電鋳の古河市兵衛がこの銅山を買収して、近代的手法で鉱山開発をした結果、豊富な鉱床を見つけ、再びこの

場所で銅の生産が勢いづいた。また、銅の増産に対応して水力発電所を建設したり、電気鉄道、架空索道、軽便馬車軌道の敷設による運搬の合理化を進めた。また、精錬技術の近代化にもつとめ、1893年（明治26年）にはベッセマー式転炉による錬銅法を日本で最初に実用化することに成功し、高品質の精銅製造を可能とし、東洋一の生産量を誇るまでとなった⁽⁹⁾。

しかし、一方ではこの製錬過程で発生する亜硫酸ガスによる煙害の発生や、採掘、選鉱、精錬から発生する重金属を含んだ排水による下流域の水質汚染や農地の土壌汚染をもたらすという公害問題（鉱毒問題）を発生する結果をもたらした。1900年には田中正造が、この鉱毒事件で明治天皇に直訴する事件が起こり、その後も被害民の運動によりこの鉱毒問題は「足尾銅毒事件」として広く知られるようになった。その結果、1897年（明治30年）には、第3回予防工事命令が発令され、堆積場、沈殿池、ろ過池、脱硫塔などの公害防除施設の建設命令が下され、わずか半年という期限内で完成しないと、鉱業停止という条件がだされ、古河市兵衛は当時のお金で104万4千円という巨額のお金を投じて工事を完遂させた。これにより、廃水対策は一定の成果をおさめたが、脱硫塔での煙害対策が十分ではなく、その後も多くの課題を抱えながら操業を続けた。しかし、1956年（昭和31年）には自溶精錬法とそれに伴う脱硫技術を確立することができ、ついには無公害技術を完成させた。1963年の足尾銅山は年の生産銅量は6,113トンという戦後最高を記録するにいたった⁽¹⁰⁾。

しかし、1973年（昭和48年）に足尾銅山は閉山し、その後も輸入鉱石による精錬が続けられていたが、1988年（昭和63年）に精錬所の稼働も停止され、鉱石による銅生産の歴史にも幕を閉じた。1989年には国鉄の民営化移行で精錬所は事実上操業を停止した⁽¹¹⁾。

このように足尾銅毒事件は、日本でもっとも悲惨な公害の原点ともなった事件であり、日本の公害史はこの事件抜きには語れないとも言われているが、足尾の人々は世界遺産登録のための運動を始めた時には、この事実は遺産認定の項目に

入れなかったのである。

VI. なぜ負の遺産としての申請をしなかったのか？

1. 土地所有の問題

足尾地域の土地所有はまだ古河鉱業が多くを持っており、世界遺産の指定運動を進めるためには土地所有者の古河電工（旧古河鉱業）の支援が必要である。しかし、このような古河鉱業の自分の会社が引き起こした過去の過ちを負の遺産として認めるのは難しい⁽¹²⁾。

2. 日本の国策

足尾地方が足尾銅山鉱毒事件で問題化していた時というのは、日本は日清戦争後のまさに富国強兵と殖産興業を推し進めていた時期であり、銅の輸出は外貨獲得に重要な役割をはたしていた。日清戦争後から第二次世界大戦まで、古河鉱業の発展は目覚ましいものがあり、また政府からも多くの官僚が天下っており、政府によっても守られていた。戦後も1955年により近代化した精錬方法がフィンランドから導入されると、さらに鉱山の生産が高まり、経済成長の前に完全に公害問題は二次的な扱いとなっていた。また、田中正造の直訴は世論に大きくアピールしたが、政府は完全に黙認し、古河鉱業も操業を続けたのである⁽¹³⁾。

3. 日本人の義理と人情：企業城下町の体質

世界遺産に指定しようとしている土地の所有は古河電工（旧古河鉱業）であり、土地所有者を告発するような行為は裏切りになるものだった。足尾に現在でも住む住民の多くはかつての古河電工の社員の子孫で、なんらかの形で恩を受けた人たちである。従って、煙害は半世紀以上も町民の間でタブー視されていた⁽¹⁴⁾。

初代古河電工の社長であった古河市兵衛は社員に対して小学校や公衆浴場をつくったりと、福祉の充実をはかり、そういったことでも知られていた。したがって、多くの恩を感じている職員が多かった。また、この時代にあって、会社が福利厚

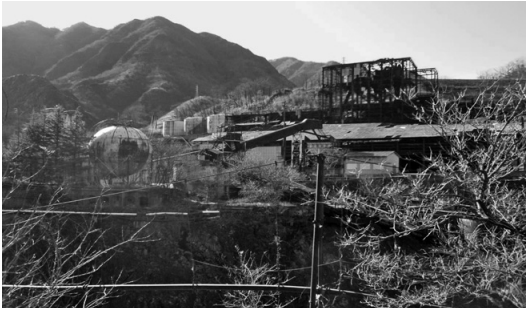


写真2 古河電工精錬所跡地

生にこれだけ力を注ぎ、社員の面倒をみる姿は、むしろ、日本の究極の経営スタイルでもあり、この時代に先駆けた会社と従業員の生活が一体化した姿を見てほしいという思いの方が強かった。

4. 世間体の構造

— 風評被害と差別、誇りと引け目 —

足尾の住民はこの公害問題を恥ずべきことだとして、隠したがってきた。日本の近代化を支えてきた誇りと同時に、日本で最も悲惨な鉱毒事件の舞台となってしまった足尾の負の部分の間で人々の心は揺れ動いていた。長い間、祖父や父親が古河鉱業の従業員だったというだけで、いじめにあってきた子孫の一人は、日本の近代化や経済発展のためにひたすら働いてきた祖父や父親なのに、なぜに自分は肩身の狭い思いで生活をしてこなければならなかったのかと憤りを感じていたという。実際にこの地域で小学校教育を受けた人達は、教科書でこの公害問題にふれることはなかったと証言している。彼らにとって、この地域が世界遺産になることで、ようやく誇りを取り戻し、今までの卑屈な心から解放される気持ちでいる。したがって、彼らが誇りと自信を取り戻すためには、世界遺産の指定理由が負の遺産であってはならないのである。町民は足尾が日光市と合併をしたあとも、自分たちの足尾のアイデンティティを模索し続けているのである⁽¹⁵⁾。

5. 地域間のコンフリクト

足尾地域に住む人たちはすべてが古河鉱業の社員というわけではなく、亜硫酸ガスなどの煙害や

土壌汚染の被害によって立ち退きを余儀なくされた農民もいる。また、被害者の農民の間でも、土地買収に応じて補償を受け取って地方に移住した人と、天皇に直訴した田中正造と最後まで共に戦った人がいて、政府の土地買収に応じた親を持つ子孫の中には『裏切り者』の烙印を押され、終生、悩んだ子孫もいた。この足尾鉱毒事件に対しておのおのの集団が別々の複雑な思いを持ちながらこの世界遺産の運動を見つめているのである⁽¹⁶⁾。

6. “ヒーロー”としての意識

地域の人々は「公害を起こした」という事実より、「公害を克服した」という評価を示したい。すなわち加害者意識より、「公害を克服した」という被害者が立ち直ったヒーローとしての住民でいたい。1897年に公害防除施設の建設命令が下された時にも、わずか半年の期限で多額の費用を投じてそれをクリアした実績を持ち、また、なによりも多くの社員がこの時代の日本の経済成長を支えてきたという大きな自負心もあった⁽¹⁷⁾。

このように、ダークツーリズムは誰がその場所をどのように解釈するのかで、異なった意味もってくる。足尾の人々にとって、足尾銅山はいち早く高度の産業技術を導入し、日本の近代化に貢献した輝かしい実績を持ったという実績を評価したい人と、古河鉱業が垂れ流した鉱毒で、自然を破壊し、移住をやむなくせざるを得なくなった負の遺産として刻み込まれている人々で解釈が異なるのである。日光市は栃木県と共同で、2007年に、近代化産業化と公害対策の起点をテーマに文化庁へ世界遺産暫定一覧表追加起債提案書を提出したが却下され、2010年に世界遺産の暫定リスト入りした佐渡の金山・銀山とは異なり、いまだに暫定リスト入りもしていないのが現状である。

Ⅶ. 日本におけるダークツーリズムの展望

それでは日本において、「負の遺産」を観光資源とするダークツーリズム発展の可能性はあるのだろうか？ それは現代社会における、日本人の死生観とも大いに関係してくるであろう。

1. 日本人の死生観の変化

今日の日本社会は「死」が遠い存在になってしまっている。長寿社会となり、人はどう生きるかといった『生き方』に関する論議は盛んになり、「死に方」や死に関する認識が薄れてしまっている。また、人の葬儀も多くは、病院、葬儀業者、公営の火葬場などで式を執り行い、「死」がビジネス化することにより、「死ぬ」という儀式が希薄化していることは間違いない。一方で、アミューズメントパークでの幽霊、お化け、ホラー等がやはり、パワースポットに行く観光がブームとなっているということは死が希薄化されてきて無意識になっているとはいえ、無意識に死に対する関心が誰にでもあることを指していることにもなるのではないだろうか⁽¹⁸⁾。

2. 日本人の死に対する罪悪感と供養の心

日本人は、死者に対して、何とかしなければいけない、人を死なせてしまった、助けることができなかつたという『罪悪感』『敗北感』があり、これが、喪に服したり成仏するまで祈る行為にあらわれる。こういった行為を日本人は身近で亡くなる人を通してかつては学習していたが、今日では、死生観が間接的な手段によって人々に意識されるようになってきており、それが、ダークツーリズムの存在価値につながってきているのではないだろうか。

3. 日本人がビジネスとするのをタブーとする“聖域”

かつての日本人は死に対する考え方には死者を記憶し、やがて、ご先祖神の守護神となってまもってくれるという思想があり、このような靈魂を観光資源として金儲けの対象とすることは神に対する冒瀆であるという観念があつたのではないかというより、かつては、ビジネスの対象とはなっていなかった。アメリカでは9.11事件で航空機が墜落した現場に観光客を連れていくことにより、一人65ドルを徴収する『フライト93ツアー』というのがビジネスになっているが、こういった事

故現場に最初に訪れるのは遺族や被害者の関係者で、死者を弔う目的で訪れ始め、それがだんだん物見遊山な関係のない観光客が訪れるようになると観光ビジネスがはじまるのである。

4. “不謹慎”の概念

「死」に対する己の態度、喪に服すべき時に、それをしないとなにか『死者』に失礼な行為をしているように感じるこの不謹慎と感じる心の確認が大事であり、何も感じなくなった時に道德観が問われる。そういう意味で、日本人の道德観はこのような場所を訪れた時に再確認できる。さらに、記憶にとどめておくべき悲劇や災害等を風化させないためにも、それを教育的、道德的価値に持っていくために、やはり負の遺産は存在し続けるであろう。

おわりに

ダークツーリズムには死や苦痛、悲しみといった人間の負の感情に関する度合い、種類、ツーリズムとしての観光資源の見せ方等でいろいろなタイプが存在するが、ダークツーリズムにはまだまだ整理すべき課題も多くある。その中でも一番の議論になるのが倫理的な課題であろう。悲しみに打ちひしがれ、喪に服した人たちの前で、それに関与しない人たちが、一緒に立っていてよいのだろうかという問題である。今年のゴールデンウィークの休みの時に、東日本大震災の現場を見に行くツアーは不謹慎だから、くれぐれも慎むようにとメディアが報道をしていたが、その代わり、がれきの撤去などのボランティアで入るツアーは大いに歓迎された。これは何を意味するものだろうか？

また、観光資源としての負の遺産を考えると、マーケティングの問題が当然起こってくる。それは多くのダークサイトをいつから観光資源の対象とすることができるのかという問題である。また、これらの場所は原形をとどめることによって価値を生じるわけだが、景観の変化や建物の老朽化に対してどのような管理が必要となってくる

のであろうか？ 広島原爆ドームの建物の老朽化が現在心配されているが、アジアの国々や日本の建築は木造建築多く、自然の風雨にさらされることによって風化が進んでいく。それをどのような形で維持管理していくかは大きな課題と言えよう。足尾銅山でも、鉍毒事件に対して最後まで戦った人たちのお墓の前に道路が建設され、ダンプカーが通りぬけるので、今にも崩れ落ちそうになってきているが、その管理は一体どうすればよいのだろうか？

また、貧困のツーリズムと言われる貧しい国のスラムや孤児院を訪ねボランティア活動をするツアーがあるが、こういったツアーは貧困が観光資源となっているため、彼らの生活が向上すると観光資源としての価値は薄まり、スラムが近代的な町並みに代われば、そこでこの観光資源は消滅するのである。アフリカの孤児院を訪ねるツーリズムの中には、外国からの観光客が来る時だけ、周辺の両親もいる子供たちにアルバイト料を払って、孤児を演じてもらうケースもあるという。

また、ダークツーリズムの中には、まさにツアーに参加すること自体が死の恐怖をもたらすものもある。例えば、チェルノブイリなどの肉体的リスクの高い場所や、実際の戦争が起きている場所へのツアーである。また、アウシュビッツや9.11等の悲劇が大きい場所での心理的リスクはどのように管理すべきであらうか？ こういった課題をもちながらもダークツーリズムが存在する理由はなんであらうか？

トニー・ウォルターは、「人は死を直視できない。したがって、ダークツーリズムは生と死の間においてスクリーン、もしくはクッションの役割を果たした形で人々は死について知ることができる」と述べている⁽¹⁹⁾。また、ダークツーリズムは自分の不幸からの一時逃避、もしくは避難場所とすることもできる。すなわち、人々はその場所に行くことによって、自分の悲しみや辛さや死や自分の不幸から一時的に逃れることができるのである。東日本大震災に出かけた人々の感想を聞いてみると、あの大きな被災現場を見ていると、自分のおかれた立場がまだまだどんなに幸せで贅沢か

を感じることもできるとか、被災した人々や多くの身内を亡くした人々の打ちひしがれる姿をみると、自分の悩みなどがこうもちっぽけなものであったかと思ひ知らされた等の感想を述べており、いずれも他人の不幸を見ることにより自分の不幸が軽減できるのである。

また、ダークツーリズムの場所というのは現代の孤立化した社会の中で、集団的共感を感じられる場所でもあり、このツーリズムを通して、道徳の勘を取り戻すこともできるのである。現代社会においては、宗教心も薄れてきており、個人主義が浸透してくると、人々は孤独感を感じ、自分の道徳観も確かめられないでいる。所在を失った状態の中で、ダークツーリズムへの集団的参加は共有する道徳観を取り戻す場ともなり、いかに生きるのかを考える機会も与えてくれる。

ダークツーリズムは記憶にとどめておくべき被害や災害等を風化させないために、それを教育的、道徳的な形に高めて人々に理解をさせる大事な役割をもったツーリズムでもある。死の発見は生の発見でもある。いかに人生を生きるべきかを考えるために死の存在はあるといってもよいだろう。その意味で、ダークツーリズムにおける観光資源というのは普遍的価値を有しており、今後、ますます注目すべきツーリズムとして研究を進展させていく必要があるだろう。

《注》

- (1) Richard Sharpley, "Shedding Light on Dark Tourism: An Introduction," In *The Dark Side of Travel: The Theory and Practice of Dark Tourism*, ed. By Richard Sharpley and Philip R. Stone, Bristol: Channel View Publications, 2009, p. 10.
- (2) *Ibid.*, p. 19.
- (3) *Ibid.*, p. 21.
- (4) http://en.wikipedia.org/wiki/Dark_Tourism
- (5) 世界遺産 <http://ja.wikipedia.org/wiki/>
- (6) 日本の世界遺産 <http://ja.wikipedia.org/wiki/> 新潟県教育庁文化行政課世界遺産登録推進室及び佐渡市世界遺産推進課、佐渡金銀山だより、Vol. 2, 2010.
- (7) 日光市教育委員会生涯学習課・世界遺産登録推進室、共に学び、共に考え、共に行動しよう、

2010. 3.
- (8) Kichiro Shoji and Masuro Sugai, *The Ashio Copper Mine Pollution Case: Origins Of Environmental Destruction*, Shinyosha, pp. 18-20.
- (9) *Ibid.*, p. 21.
- (10) *Ibid.*, pp. 22-29.
- (11) *Ibid.*
- (12) ガイドインタビュー, 2010年9月足尾市。
- (13) 埜 和也, 鉍毒に消えた谷中村: 田中正造と足尾鉍毒事件の100年, 随想社, 2008, pp. 11-12.
- (14) 同上, p. 111. ガイドインタビュー, 2011年9月
- (15) 同上, pp. 27-29.
- (16) 同上, pp. 111-113.
- (17) 同上
- (18) 新谷尚紀, お葬式, 死と慰霊の日本史, 古川弘文館, 2009, pp. 91-96.
- (19) Tony Walter, Dark Tourism: Mediating Between the Dead and the Living, In *The Dark Side of Travel: The Theory and Practice of Dark Tourism*, ed. By Richard Sharpley and Philip R. Stone, Bristol: Channel View Publications, 2009, p. 39.

《参考文献》

- 埜 和也『鉍毒に消えた谷中村: 田中正造と足尾鉍毒事件の100年』随想社, 2008年
- 日光市教育委員会生涯学習課・世界遺産登録推進室『共に学び, 共に考え, 共に行動しよう』日光市, 2010年

新潟県教育庁文化行政課世界遺産登録推進室及び佐渡市世界遺産推進課『佐渡金銀山便り Vol. 2』新潟県教育庁, 2010年

Sahrpley, Richard. "Shedding Light on Dark Tourism: An Introduction." In *The Dark Side of Travel: The Theory and Practice of Dark Tourism*, edited by Richard Sharpley and Philip R. Stone. Bristol: Channel View Publications, 2009

東海林吉郎『国連大学: 人間と社会の開発プログラム研究報告』国連大学, 1982年

新谷尚紀『お葬式, 死と慰霊の日本史』古河弘文館, 2009年

Walter, Tony. "Dark Tourism: Mediation Between the Dead and the Living." In *The Dark Side of Travel: The Theory and Practice of Dark Tourism*, edited by Richard Sharpley and Philip R. Stone. Bristol: Channel View Publications, 2009

インターネットサイト

ダークツーリズム (http://en.wikipedia.org/wiki/Dark_Tourism) 2011年5月30日取得

日本の世界遺産 (<http://ja.wikipedia.org/wiki/>) 2011年5月30日取得

ガイドインタビュー

2010年9月足尾市及び2011年9月日光市